

# 仮設住宅でサロン活動始める

能登半島地震の被災地への支援物資の搬入、被害を受けた建物や家財の片付け作業などに取り組んできた宗派・能登半島地震支援センター（金沢市・金沢別院内）は、「こころのケアを」と10月から新たに、仮設住宅の集会所などでのサロン活動（お茶会）を開始した。これに伴い、支援センターでは、これまでの復旧作業に携わるボランティアに加え、サロン活動を手伝う傾聴ボランティアの募集を始めた。

## 能登半島地震支援センター

サロン活動は、仮設住宅を生かした活動となる。サロンの生活が続く中、高齢者などの入居者が孤立しないようにと交流の場を設けて新たなコミュニティ作りを支援するほか、入居者の不安や苦悩に寄り添う傾聴活動を行っていく。宗派ではこれまで、東日本大震災の被災地などでサロン活動を実施しており、その経験



## 「少しでも被災者の心安らぐ時間を」

（66、能登島えの目町・浄尊寺門徒）が協力を申し出て、事前に全世帯に案内チラシを配布。当日は、ボランティアや同支援センター職員などスタッフ6人と浄尊寺の勝尾考住職が、同団地の集会所に机や椅子を並べ、飲み物と菓子類などを準備した。

入居者17人が参加した。長年暮らしたそれぞれの地を離れ、4月から入居が始まったこの仮設住宅に越してきた。慣れない生活に、部屋に閉じこもりがちの人も多いという。ある女性は「一緒に暮らす娘が仕事から帰ってくるまでは、籠の中の鳥のように部屋の中に一人でじっとしている」と語る。

後藤さんは「こころは浄尊寺さんなど浄土真宗の門徒の入居が多く、コミュニティがそれなりにできています。それでも一人暮らしの高齢者が多く、1日中部屋に閉じこもりがちの人もいます。できるだけこういう場に出てきて、みんなとお茶を飲みながら会話し、胸にため込んでいたものを少しでも吐き出してほしい」とサロン活動に期待する。

久しぶりの交流の場とあって笑顔が浮かべる参加者が多い。顔見知りの人も多いが、あらためて参加者が一人ずつ自己紹介しているとき、スタッフが点てた抹茶を味わいながら、和やかな談笑の時間を過ごした。話が弾み中、心に抱えるものを打ち明ける人もいる。約10分離れた能登島東部に自宅がある女性は「これまでずっと家の畑で取れた野菜を食べてきた。野菜を買って食べるようになったのがどこか悲しい」と語った。また、自宅が全壊した近藤晴美さん（87）は「今日は、浄尊寺さんの仲間と久しぶりに会えてうれい」と語る。壊れた仏壇からご本尊を運び出し、同寺に預かってもらっているという。「こころでは、ご本山からいただいたご本尊（いちょう）に手を合わせ、毎日お仏飯を供えている。これからも阿弥陀さまと一緒に過ごしていく」という言葉が涙声となっていた。

参加者の話にじっと耳を傾けたスタッフたちは「地震はそれぞれの人たちの生活を奪った。そういう苦しみを抱えた人たちに今後もサロン活動を通じて寄り添っていきたい」「次は法話を聞きたいと希望されたことが印象に残っている」などと語っていた。

サロンは毎週月曜から水曜の3日間、4市町で開催していく。同支援センターは「自宅の再建や今後の生活など多くの課題を抱え、不安や悩みにさいなまれる人もおられる。息の長い活動を続け、少しでも被災者の方々が心安らぐひとときを過ごしてもらえようようにしていきたい」と話す。

サロン活動のボランティアは、宿泊所の定員と、中長期的な活動継続のため、少人数での参加を呼びかけている。併せて、サロンで提供する菓子類の提供も呼びかけている。詳しくは同支援センターホームページ。 <https://jovai-notosen11.wordpress.com/>